
藍の世界

優月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藍の世界

【Nコード】

N1707S

【作者名】

優月

【あらすじ】

藍色の瞳は禁忌の色、異形の存在。

そう言われ、腫れ物にさわるように恐れ、敬われながら育った紫苑。自分でも自分の存在を否定せざるをえなかった。そんなとき出会った存在。

藍色の瞳に違う世界が見えた瞬間だった。

プロローグ（前書き）

否定されつづけた存在に見えたひとすじの光。

たったひとつ、その存在さえいれば、生きていけた。

自分を否定しない、ありのままをみてくれる存在。

いつか迎えにいくまで、その存在を思い、生きてゆくと決めた。

この藍色の瞳をきれいといってくれた、かの君を。

プロローグ

なんて不思議な世界だろう。

力あるものが迫害され、うとまれる。

自分など存在してはいけないと思わざるをえなかった。

そんなときに会った存在に、藍色の瞳に映る世界は一変した。

たったひとりの存在、唯一の存在。だからこそ愛しく、求めずには
いられない。

「どうしたの？怪我してるの？」

不思議そうに顔を覗き込んできた少女に、しゃがみこみ顔を伏せて
いた少年はびっくりしていた。

なんのくつたくもなく、笑顔をむけられたことがはじめてでどう反
応していいのか

わからなかった。

「わあ、きれいな目だね。外人さんかなあ。

気分悪いならいっしょにうちに帰ろう？。」

かけられた言葉にまた呆然としてしまう。そして思わず問うていた。

「気持ち悪くないの、、、？」

しほりだすように紡がれた言葉の意味がわからないというように、

心底不思議そうな顔で少女は笑った。

「どうして気持ち悪いの？私の大好きな色なのに。」

きれいな色！！私の目もあなたと同じ色がよかったわ。」

なんの打算もなく、心底そう思っているといわんばかりのその顔に、

自分の心が変わっていくのがわかった。

「、、、ありがとう。」

名の意味

「ふざけないでよっ！！ いい子ぶって何様のつもり！？」

背中にはしる激痛に、春陽^{はるひ}は自分が屋上のフェンスにたたきつけられたことを知る。

目の前にいるのは自分と同じクラスの少女達。

理由は簡単、クラスでいじめにあっていた子をかばったため、今度はその標的が自分に

なっただけのことだった。

「人の痛みがわかる子になってほしい。」

「暖かい、春の陽射しのように、人をあたたく包み込める人になりなさい。」

そう願いを込めてつけられた自分の名のごとく、春陽はその子をかばった。

が、現実はそんなに甘くはない。

それでも、やっぱり自分は間違っていないのだと春陽は前を見据えた。

自分をにらみつけてくる数人の女の子の前に、春陽は言った。

「自分達のしてることの恥ずかしさがわからない？」

自分がもし、逆の立場だったらどうするの？ その痛みもわからない？」

おびえることなく、凜としたその瞳の強さに少女達はひるむも、リーダーであろう

一人の少女が気に食わないとばかりに春陽の胸倉を掴む。

その拍子に春陽の首にかかっていた、指輪を通したネックレスがちぎれて落ちた。

「あら？何かしらこれ？ 大事なもののようね。」

その瞬間顔色の変わった春陽の様子に、いいものを見つけたといわんばかりに

その指輪を持ち意地悪く少女は笑った。

「はいつくばって、許しを請いなさい。そしたら返してあげる。」

満足げにいう少女に、春陽は一瞬瞳がゆれたが、ゆっくり首を振った。

「あなたはどんどん自分を貶めてる。かわいそうになるわ。」

そんなことして楽しい？いつか、その黒い感情に飲み込まれるわよ。」

その言葉にカッとした少女はその指輪を思わずフェンスむこうへ投げていた。

「ざまあみる！！」

そうふりかえり春陽をみるも、そこに春陽はいなかった。

そして自分の後ろへ視線をやる、少女達の口から悲鳴が響いた。

次の瞬間少女がみたのはフェンスを越え、投げられた指輪に手をのばす春陽の姿だった。

ここは4階、フェンスの向こうは当然何もない。

呼ぶ声

その瞬間、春陽は自分でもわからない衝動に突き動かされていた。

気がついたら指輪に手を伸ばしてフェンスをこえていた。

”いつか、いつかまた会おうね、僕はそのときまでにきっと強くなる。

君を守れるぐらいきつと強くなっているから。

これはその約束の証。

必ずむかえに行くからね。

それまで、待ってて、、春陽。

”

脳裏に懐かしい、声が響く。

藍色の、美しい瞳の少年が笑っていた。

どこかさびしく、はかない表情をしていた彼が、初めて自分に見せてくれた笑顔は、

春陽の心に忘れえぬ思いを残した。

幼い想い、そして幼い約束。

それでも、少年の瞳と同じ藍色の石を埋め込んであるその指輪を
それから春陽は一度もはずすことはなかった。

きつといつか会えるのだと、自分の名のようなあの笑顔をくれた少
年に

名に恥じない自分でありたいと、春陽は思い過ごしてきた。

その結果がこの状況なのは、後悔はないが、ただ哀しかった。

どんどんおちていく自分の体に、春陽はうすれゆく意識の中少年の
名を呼んだ。

” 紫苑 ”

二度目の邂逅

紫苑は自分の名を呼ぶその声を聞いた。

自分がこれまで求めてやまなかった存在が、自分を強く呼ぶ声を。

その手を掲げ、愛しい人の名を呼ぶ。

” 春陽 ”

その瞬間頭上で光が爆発した。

ものすごい光の洪水の中、ゆっくりと少女はおりてきた。

藍色の光に包まれ、守られるように、紫苑の腕の中に春陽は下りてきた。

意識のないその体を守るように紫苑は優しく抱きしめる。

「やっと、、会えたね、、春陽。」

その存在を確かめるように、春陽の頬を優しくなぞる。

手に伝わるぬくもりが、確かにここに存在するのだと教えてくれる。

藍色の瞳からひとすじの涙が流れた。

長い間、流れることがなかった涙が春陽の頬をぬらした。

東の砦

「隊長！！大丈夫ですか！？」

目のくらむような光の洪水がおちつくと、紫苑のもとに何人もの隊員が集まる。

自分達の知る隊長が、濡れるような黒髪のまだ幼さを残した顔立ちの少女を、

今まで見たことのない優しい瞳でみつめる様子に皆啞然としていた。

「お怪我はないですか隊長！！」

今の光の爆発はいつたい！？、、その少女は？」

紫苑を囲み、矢継ぎ早に隊員達が話しかける。

「ああ、、大丈夫だ。

やっと、やっと会えたんだ。おれの”光”に。」

大事そうに、その胸に春陽の頭を抱きこみ、心底嬉しそうに紫苑は言った。

ベルセウス帝国の東のはずれに、国境を守る砦がある。

そこは付近の森からは魔物が、そして隣国からは国攻めにあう危険な土地にあった。

誰も決して望んではいけないその砦に、紫苑はいた。

一生幽閉されるか、その砦におもむくかの選択に、紫苑はこの地で生きることを選んだ。

ほとんど捨て駒として使われる兵士たちと、同じように生活し、この地で生き抜いた。

王の末子として生まれるも、その異形の目と膨大な力ゆえに恐れられ、なかば城より

追放された紫苑を、最初兵士たちは疎んでいた。

しかし、度重なる戦のなかでのその力と、決して自分達を見捨てず守り戦うその姿に、

いつしか、紫苑を中心とした軍団ができていた。

その結束は帝都の近衛隊より強く、統率されていた。

王や貴族達からは疎まれていたが、帝都の民は自分達の生活を体張って

守ってくれる軍団を、尊敬と畏怖の念をこめいつしかこう呼ぶようになった。

帝国を守る、誇り高き猛者たち、
” 藍色の騎士団 ” と。

騎士のひとりごと

突然あらわれた黒髪の少女を優しく抱きしめる隊長に、俺は度肝をぬかれた。

あんな優しいような表情ができるのだと、思わず目をみはる。

それは俺だけでなく、まわりの騎士達も同様で、皆二人のそんな様子に

くぎ付けだった。

あらくれどもの集落、呪われた砦、地獄に一番近い場所、帝都の貴族連中や

坊ちゃん騎士達に散々に言われている自分達だったが、今は胸を張って自分の

居場所を誇れる。

その最大の原因である彼の、彼らからぬ様子にただただ驚くばかりであった。

そんな様子に、今となっては懐かしい記憶が思いだされる。

初めて彼、紫苑がこの砦に派遣されてきたとき、自分も含めて前線に赴く

騎士達はこれで自分達の運命は終わったと思っていた。

戦況は思わしくなく、疲弊した騎士達でいっぱいなのに、さらに士気をさげるような

呪われた王子が隊長として派遣されてきたのだから。

もともと騎士といっても、平民出であつたり、なにかいわくがあつたりとやっかい

ばらいされてきたあらくれどもの集団であつたがゆえに、統率も何もあつたもので

はなかった。

皆どうせくさつても王子様なんだから、自分達を捨て駒のようにあつかうのだろつと、

前線で指揮などとれるものかとはかにしていた。

だが、紫苑はその膨大な魔力で敵を最前線でなぎはらい、そして味方である自分達を

守つた。時には盾となり、時には癒しの魔法によって。

それまで膨大な死傷者がでていたのに、それから一人としてかけることはなかった。

その姿に自分達の認識は変わっていった。

同じ死線をくぐりぬけてきたからわかる、彼の覚悟と、哀しい運命を知った。

一人、また一人と彼の指揮に従い、やがて今ひとつの騎士団としてまとまり、

この地獄と言われた砦を守りきっている。

自分は紫苑の副官になり、今は忠誠を誓っている。

この地獄の数年間を一番近くでみてきた自分だからわかる、彼の心からの喜びを感じた。

人としての感情を忘れていたであろう紫苑に、このような顔をさせる少女。

この少女は、紫苑の運命を、そして自分達の運命を変える存在なのかもしれないと

漠然と騎士は思った。

再会

目を開けると、見知らぬ天井に春陽はしばらく自分がどこにいるのかわからなかった。

しばらく呆然としていると、自分の手に重なる温もりに気づく。

自分の寝ている寝台に顔をうつぶせ眠る青年に、春陽は見覚えがあった。

急に意識が覚醒する、自分がどういう状態であつたかを春陽は思い出した。

落ちていく意識の中、どんどん近くなる地面にたたきつけられる瞬間自分が思わず、

思い浮かべ、名を呼んだ人が目の前にいた。

そう思つた瞬間視界がどんどん潤み始めるのを感じる。

自分がどれほど会いたかつたのか、このとき初めてわかつた。

早く目を開けて、その藍色の瞳をみせてほしいと思わず手を握ってしまっていた。

それにすぐ反応して、青年の目が開く。

それは間違いなく、春陽が切望してやまなかつたあの藍色の瞳だった。

「、、、春陽。目が覚めた？」

心底嬉しそうに目を眇め、まぶしそうに春陽を見上げるその笑顔に春陽はなんとも

いえない気分になる。

「紫苑、、、だよね？ほんとに本物？ 夢じゃない？」

不安気にそう聞く春陽に、紫苑はその手を取り、自分の頬へとあてた。

「夢だと思う？俺は夢なんかにしたくない。俺はここに、春陽の側にいるよ。」

「あたたかい、、、ほんとだ。紫苑だ、、、。」

目の前の存在が本物だとわかった瞬間こらえきれないように春陽の頬を涙が伝った。

その涙を優しくぬぐいながら、紫苑も目の前にいる奇跡を感じていた。

この瞬間をずっと待っていたのだと、二人はそう感じずにはいられなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1707s/>

藍の世界

2011年10月8日17時24分発行